

■第七章 原因によるもの（条件〔縁〕づけられたもの conditioned〔有為〕）の考察

この章までで中論には一つの区切りがつく。因果関係や変化と無常、元素と性質、集合体などの、仏教の基本的な分析的カテゴリーが一通り検討されたことになるからである。次の八章から十三章では、第四章の集合体の分析とは別に、経験の主体の問題が取り上げられている。

1. もし生じること arising が（原因によって）生み出されたもの produced（有為）¹ なら

それは三つの性質 three characteristics（〔因の〕三相）² をもち合わせているはずである

もし生じることが（原因によって）生み出されたものではないのなら
生み出されたものの性質がどうして存在し得るだろうか

1. 意識

（事物は「依存的に生じる」という教義は受け入れており、その上で、当の「依存的に生じる」ということ自体は絶対に正しいのであり、いついかなるときも不変の〔実体的〕真

1. Tib: du byed. ここでは「原因を持って生まれたもの」という意味で使われている。ガーフィールドはこの語についてさらにこう注を付している：

この語はしばしば 'disposition'（傾向）、'action'（カルマ／業）、あるいは 'compounded'（構成されたもの）と訳される。どの表現を当てると一番良いかを決めるには、どんな文脈であるかが重要である。仏教形而上学ではこれらの意味は綿密に関係し合っている。Kaluphana (1986)は 'conditioned by dispositions'（性質によって条件づけられている／性質に依存している）という意味でこれを解釈しているが、'conditioned'（原因によるもの／条件づけられたもの）という語を用いている。（中略）私としては、この解釈がナーガールジュナのテキストに合致しているとは思っていない。Garfield p.160

2. 生じること arising（生）、存続状態 stasis（住）、および消滅 cessation（滅）の三つである。仏教の見方では、すべての事象は原因に依存して生じ、原因に依存して存在状態に留まり、そして原因に依存して存在を止めると考えられている。

理だと主張する者がいる。彼らにとっては、「依存的に生じる」ということ、それ自体が独立した実体として本質的に存在しているのである。その場合、問題の「依存的に生じる」ということ自体は、原因に依存して生じるか、原因に依存しないで生じるかのどちらかになるはずである。) もし「生じる」ということそれ自体が、原因に依存して生み出されたものであると考えるならば、それは原因に依存した生起・存続・消滅という、無常を表す三つの性質をも持っているはずであ(り、その結果、「依存して生じる」ということ自体が無常だということになる。(それは彼らの言う不変の真理とは矛盾する。「依存して生じる」性質自体が常に変化して一定でないということならば、時には「依存的でなく生じる」こともあり得るということになるだろう。)

(しかし第二のケースとして、) もし「生じる」ということ自体は原因によって生み出されたものではないと主張するならば、それはいったいどこからやって来たのだろうか。どんな原因にも依存しないで最初からその本質を持って実体として存在していたということになるわけである。それならば、彼らも認めているような、「依存的に生じるという性質」(生み出されたものの性質)は存在できなくなる。

この詩も解釈が難しい。最初の行を字義通りにシンプルにとらえて、「もし生ずることが原因に依存して生ずるということの意味するなら」とすると、生じるということはすべて依存的である、という具合にも理解でき、必ずしも「生じるということ『それ自体』が本質的に」という意味ではなく、中観派も認める正統的な考えになりそうだが、そうすると一行目を二行目で否定し、三行目を四行目で否定するという構造ではなく、一行目と二行目は正しい主張となり、三行目と四行目で間違った見方を否定する構造となる。しかし一、二行目に仮定法が用いられているのでこれは苦しい見方であろう。

2. もし生じるなどの、例の三つが分離されたもの *separate* なら

(原因によって) 生み出されたものとしての性質(依存性)を持って働くことはできない

しかしそれらのものが同時に

一つのものとして統合されることがあり得ようか

2. 意識

（「依存的に生じること」自体が本質的な存在だと主張する者にとっては、依存的なものの性質である、生じること、存続すること、消滅することという三つも本質的な実体だということになるだろう。その場合、三つは個々に独立した三つの実体であるか、あるいは三つまとめて一つの実体であるかのどちらかであろう。）もし「依存して生じる」こと自体の性質である、生起・存続・消滅という三つのあり方が完全に別個の実体として相互に独立して存在しているようなものなら、「原因によって生み出されたもの」の性質である「依存性」を持って働くことはできないのである。（別々に存在しているなら、依存的に生じる事物のうちのあるものは常に生じ続け、あるものは存続し続け、またあるものは永久に消滅し続けるなどということになってしまう。すべての事象は生じ、存続し、消滅する無常のものだ、と説明していたのではなかったのか。したがって依存的に生じるという教義を受け入れながら、三つの性質が別々の実体であるなどということは主張できない。三つは関連し合っているのである。）しかしだからといって、それら三つのもの——生起・存続・消滅——が、同時に生じる一つの実体として統合されているなどということも考えられないだろう。（生じることと存続している状態、また消滅することとは、お互いに矛盾する概念であって、同じものが生じながら消滅しているという同時性など考えられないではないか。したがってどちらの場合も、実体としてとらえようとするところに間違いが存在しているのである。）

3. もし生じ、存続し、消滅することが

（原因によって）生み出されたものとして以外の性質を持っているなら

無限後退 infinite regress が生じることになるだろう

もし（どんな性質も 3）持っていないなら、それらは（原因によって）生み出されたものではないことになる

3. この括弧内の語は原文にはないが、こうしないと二行目の「生み出されたものとして以外の性質を持っていないならば」と解釈できてしまい、意味が通じなくなる。

3. 意識

（別の可能性もあるかもしれない。）もし生じ、存続し、消滅するという三つの性質が、

原因によって生み出されたものという性質（依存性）以外の性質を持っていたとするならばどうか。しかしその場合は、（その性質とはいったいどのようなものなのだろうかという疑問がわく。その新たな性質は、生じたり、存続したり、消滅したりするのだろうか。――こんな風にもう一回同じことを問うことになるならば、その答えとなる性質も例の三つ以外の性質であると再度答えるだろうし、すると「そのまた性質は？」と何度でも問いは繰り返されることになり、）論理の無限後退が生じてしまうだろう。ならばいっそ、もし生じ、存続し、消滅するという三つの性質が、それ自体はどんな性質も持っていないと考えるならばどうか。すると、それら三つの性質は（原因によって）生み出されたもの――依存的に生じたもの――としての性質も持っていないことになる。（つまりこう考える反論者は、すべての事象が「依存的に生じるということ自体は本質的真実だ」と主張したかったはずなのに、「依存的に生じる」という元の原則を否定してしまうことになるのである。）

4. 生じることが生じることからは

根本的生起 the basic arising (本生) (という考え) のみが生じてくるのである
根本的生起 (本生) が生じることが
生起を生じさせる

4. 意識

（反論者はこう言うかもしれない。）生じることが生じると言うことによって、おのずと「根本的生起」という考えが導き出されてくる。その――より本来的な――「根本的生起」が生じることによって、個々の依存的に生じる事象が生じてくるのである、と。

これは初期仏教の一つの派で主張されていた考えである。4 その考えによると、依存的に生じることには二つのレベルがあり、一つは、個々のすべての事象が依存関係にあるという表面的なレベルであり、そこではすべてのものが無常である。もう一つは、そうした具体的な依存関係そのもの――依存的生起それ自体――がそれに依存して生じてくる大本

4. Garfield p.163

のものとしての、「根本的生起」のレベルである。この根本的な生起こそが独立した本質を持って存在している実体であり、生じてくる個々の具体的なものは実体ではないということである。

5. もし、あなたがたが言うように、生じることが生じるということが根本的生起（本生）を生じさせているというのなら
そのあなたがたの言い方にしたがって言うなら、なぜ
その根本的生起から生じたものではないこれ this（生じることが生じること）
が、それ that（根本的生起）を生じさせるのだろうか 5

5. 意識

あなたがたが言う通りだとして、「生じることが生じる」という考えから「根本的生起」（本生）という発生源が導き出されるのだと考えてみよう。（そうすると、その「生じることが生じること」が「根本的生起」を生み出したと言っているわけである。）そうならば、「生じることが生じること」は「根本的生起」から生み出されたわけではなく、その逆だということになるが、なぜそんなことが可能なのか。（すべてのものが「根本的生起」から生み出されるとあなたがたは主張していたのではないか。）

5. この詩には「これ」とか「それ」とかいった代名詞が多く、それらが何を表すかで混乱しがちである。参考までにガーフィールドの英訳を記しておく：

1-2 If, as you say, the arising of arising gives rise to the basic arising,

3-4 How does this, not arisen from the basic arising, give rise to that?

Garfield p.163

6. もし、あなたがたの言うように、根本的生起から生じたものが
その根拠 the basis を生じさせるなら
その生じないものの根拠 that nonarisen basis は
どのようにそれ（根拠） it を生じさるのだろうか 6

6. 意識

もしあなたがたの言う通りならば、「根本的生起」から生じた個々の依存的なものの中のひとつのものである「生じることが生じること」という考えが、同時にその「根本的生起」自体を生じさせる根拠ともなるわけである。（すでにここまでで、原因から生まれた結果が反対に原因をも生み出すという循環論になっているのである。）それならば（循環論に陥らないように考えるとして、）「根本的生起」から生じないもの nonarisen ならば、いったいどんな風にまともな根拠を提出できるだろうか。

前半二行は循環論的な矛盾を暗に指摘している。原因である根本的生起というものに依存して個々の依存的な事象（「生じることが生じること」という概念もその一つ）が結果として生じ、反対にその結果である個々の事象に依存して、原因であったはずの根本的生起が説明されるのである。原因が結果を生み出し、結果がまた原因を生み出すという循環論に陥っている。

後半二行はそうした循環論に陥らないために、個々の依存的な事象でないもの（〔依存的には〕生じないもの nonarisen）に依存して根本的生起が生じると考える場合である。しかしこのように考えるということは、また新たな種類の根本的生起を提唱することなのである。普遍的で生じたり消滅したりしない根本のものとして「根本的生起」という説明原理を考え出してきたのに、また新たにその根源を問うとなると、これは永遠に続く論理後退になってしまう。要するに説明するということは何か他の関係項に依存して説明する

6. ガーフィールドの英訳は以下の通り：

1-2 If, as you say, that which is arisen from basic arising gives rise to the basis,

3-4 How does that nonarisen basis give rise to it?

Garfield p.164

ということであり、何かに依存するということと実体的真理（「根源的――」）とは矛盾するということである。

7. もしこの this 生じないものが
それ that を生じさせることができるならば
その場合はあなたがたが熱望する通り
そのこと it が、生じているものを生じさせるだろう ？

7. 意識

もしこの、「根本的生起」に依存してそこから生じたような個々の事象ではないようなもの――生じないもの――を根拠として、それに依存して「根本的生起」が生じるのだと説明することができるなら、そのときは確かにあなたがたが主張したがつているように、その生じないものに依存した「根本的生起」が、個々の依存的な事象を生じさせることができるだろう。（そうすると「根本的生起」と、その根拠となる「生じないもの」――つまり新たな根本的生起――とが二重に存在することになり、その新たな根本的生起のそのまた根拠を問わねばならないという終わりなき問いが生じてくるはずだが。）

ここでは前の詩を受けて、根本的生起とはまた別の、より根本的な生起というものに依存して根本的生起が生じると説明できるなら、と言っている。これは、根本的生起というものの成立根拠を問うことをやめない限り、矛盾が続くという指摘である。したがって反論者に対して、根本的生起それ自体は何にも依存せず自ら生じるとか、成立根拠に関係なく存在している、とか主張させるように誘っているとも言える。そしてそれを受けて次の詩で反論者は、根本的生起は何か他のものの根拠によって生じるのではなく、自分自身を根拠として生じているのだと言うのである。実際のところ彼らは彼らの言い分として初めからそのように主張していたわけである。

7. ガーフィールドの英訳は以下の通り：

1-2 If this nonarisen could give rise to that,

3-4 Then, as you wish, it will give rise to that which is arising.

Garfield p.164

8. ちょうどバターランプが
それ自身と他者とを照らし出すように
生じることもそれ自身を生じさせ
生じた他のものをも生じさせる（というのならば）

8. 意識

（するとあなたがたはこう反論するのであろう。）ちょうどバターランプが、そのバターランプ自体とその周囲にあるものの両方を照らし出すように、（依存して）生じるということそれ自体（根本的生起）も、自分自身を生じさせ、同時にそれによって生じる他のものである個々の事象をも生じさせるのである（、と）。

反論者は、個々の事象は依存的に存在している——つまり空である——が、依存して生じるということそれ自体は空ではなく永遠の真理であり、独立して存在している実体（＝究極的真実）だと言うのである。

9. バターランプの中とそれが置かれた場所には
暗闇（くらやみ）はない
それならばバターランプは何を照らすのか
照明とは闇を払拭することではないのか

9. 意識

（依存的に生じること自体と、依存的に生じた事物とが、それぞれ依存的かそうでないかをバターランプの比喻で説明するならば、前者をバターランプ自体、後者をそれが照らし出す事物にたとえるのは正しくない。なぜならこの比喻を持ち出した段階ですでに前提として、光か暗闇かの二項対立で依存的かそうでないかが示されようとしているのであるから、依存的なものは光、依存的でないものは光の届かないもの——つまり暗闇でなければ

ならないからである。8 あなたがたは) バターランプの中と、その置かれた場所――つまり周囲のもの――の両方ともに暗闇はまったく存在していない(と言うわけである)。しかしそれならばこういう一方的な状況において、(あなたがたの言う) 依存性のバターランプはいったい何を照らすものなのだろうか。照明とは「暗闇」を照らすものではなかったのか。

10. もしバターランプが現れても
暗闇に届かないのなら
その現れたバターランプは
どうやって暗闇を払拭できたのか

10. 意識

(依存的でないものは光が届かないもの、つまり暗闇なのである。そして依存性そのものは永遠の真理だと言うあなたがたの論法では、暗闇は光から独立して、まったく別個のものとして常に存在し続けているものだということになるだろう。そういうことならば、) もしバターランプが現れても、その光は暗闇には届かないことになる。(光と暗闇とは完全に別々のものなので、同じところに存在できないからである。) 光が暗闇に届かないなら、その現れたバターランプはどうやって暗闇を払拭できたのだろうか。

8. 暗闇を実在するものとしてとらえることが当時の仏教徒にとって一般的だったことについて、ガーフィールドは詩文の解説で触れている:

ナーガールジュナがここで展開している論法にも含まれているように、暗闇を実在的なものとしてとらえることは、仏教徒の伝統ではごく一般的な哲学論法であった。したがって具象化(実体化)された存在論を採用するかぎりにおいては、暗闇は光と同様に実体化されることになる。したがってこのバターランプのたとえに反論しようとする場合、ナーガールジュナがすでにやってみせているように、互いの関係に依存し合いながらも本質的に存在する事物を必要とする理論の難点を、このようにうまく利用することができるのである。Garfield p.165

11. もし暗闇を照らすことが
バタールンプが暗闇に届くことがなくても起こるなら
世界中のすべての暗闇が
照らされることになるはずである

11. 意識

(このように、) もしバタールンプの光が暗闇に届かないのに、暗闇が照らされるなどということが起きるのであれば、世界中のすべての暗闇が一つのバタールンプで照らされることも可能だろう。

12. もし、それが輝いているときに
バタールンプがそれ自身とそれ以外の対象とを照らしているなら
暗闇もまた間違いなく
それ自身とそれ以外の対象とを包み隠しているはずである

12. 意識

(あなたがたの論法からするならば、「依存性それ自体」は、依存性という光に照らされずに存在できている実体なのであるから、この比喩では暗闇だということにならなければならないはずである。しかし) あなたがたは「依存性それ自体」がバタールンプであり、変わることはない実体として、自分自身とそれ以外の対象とを照らしていると主張しているわけである。(そうすると、バタールンプの光と暗闇とは等しい実体だと考えねばならなくなるし、) それならば、暗闇もまたそれ自身とそれ以外の対象とを包み隠していなければならないはずである。

13. どうしたらこの生じることが――生じないものとして
それ自身を生じさせることができるというのだろうか
そしてもしそれが、すでに生じているものであるような何か他のものから
生じたのなら、そのようなまた別の生起というものがどう有効なのだろうか

13. 意識

依存的に生じるということそれ自体は依存的には生じないものであるが、それ自身を自分で生じさせるのだなどということがどうして言えるのだろうか。（どうして生じないものだけが生じることの説明から逃れられるのだろうか。）また反対に、依存的に生じるということそれ自体が、すでに生じてしまっているような何か他の事象に依存して説明され、その他のものから生じたのだと言うのならば、（その他のものは何からどう生じたのかをまたあらためて問うことになり、どうどうめぐりになってしまうはずである。そうすると、）別のものから生じると説明することにどんな有効性があるのだろうか。

14. 生じたもの、生じてないもの、そして生じつつあるものは
どのような意味においてもまったく生じることはない
したがって彼らは行ってしまったもの、行ってないもの、そして行くことと
まったく同じように理解しなければならない

14. 意識

（それ自身を生じさせるような実体としての）「すでに生じたもの」、「まだ生じてないもの」、そして「現在生じているもの」は、（実体である以上、）どのような意味においてもまったく「生じる」という（時間的変化をする）ことはない。これは前に運動の項目で論じたこととまったく同じであると理解しなければならない。つまり、（「行く」という運動は、まだ動いてない過去から動いた現在へと移行行く時間の流れに依存しており、また動く主体にも依存しているという意味で関係的なものであるので、）「行ってしまったもの」、「行ってないもの」、そして「行くこと」のどれもが、そのもの自身の本質をもって常に存在している実体ではないということである。したがって「依存的に生じる」という関係的概念も、永遠の真理としては主張できないのである。

ナーガールジュナはここで、第二章の論議を再び持ち出しているのである。ここで問題にされている「生じる」ことは、生じるということそれ自体の「もの」としての実体性と、依存的に生じるということがいついかなるときも絶対の真実であるとするような見解の両方に適用できる。変わらぬ絶対性というものを主張することは実体を想定することと同じであり、因果関係的に考える人間にとっては不可能なことなのである。

15. そのものがまだ生じていないときに
生じることが起きているのなら
どうしてそのものがその生起に依存して
生じていると言えるだろうか

15. 意識

具体的にある事物がまだ生じていないときに、「生じるということそれ自体」は常に生じていて存在していると言うのであれば、これから具体的に生じるはずのその事物が、どうやって「生じることそれ自体」に依存して生じるなどと言えるのだろうか。（存在の仕方がまったく異なったもの同士が関係し合えるのだろうか。存在していなかった事物が、まだ存在していないときに、存在している「存在すること」と関係できるだろうか。）

そもそも依存して生じるということは、何か「他のもの」に依存して、それを原因にしてそれとは別のものが生じると説明することである。生じること自体を原因にして生じるのではない。「他のもの」として選ばれる原因が具体的に何であるかは、分析者が何を原因として選ぶかということに左右されるのである。部屋が明るいのはバタールンブが原因かもしれないし、その炎が原因かもしれない。また誰かがランプに火を灯したことや、その欲求が原因かもしれないし、燃料のせいかもしれないのである。まったく恣意的に何でも原因にできるということはないが、ある程度は見方によって、恣意的に原因を想定できるということである。唯一の根源的な原因などというものはそもそも存在していない。

16. 依存的に生じたものはどんなものであれ
本質として静けさに満ちて peaceful（寂滅して）いる
したがって生じるものと生じること自体も
それ自身の意味では静けさに満ちている

16. 意識

依存的に生じるものはどんなものでも、本質を持った実体という意味では成立しない。その意味では生じず、消滅もせず、何の変化もせずに静まっていると言える。したがって「生じる事物」と「生じることそれ自体」も、単独で存在する実体という意味では静ま

りかえっているのである。

「本質的として静けさに満ちて」 essentially peaceful の部分の解釈は難しい。単純に読むと、事物はそこにあるように見えて、「本当は何も存在していない」と言っているようにも解釈できてしまう。これは虚無主義である。また実際のところ後代の唯識派のように、「心」という実体だけが唯一存在していて、現実に見えている個々の事物は実は幻覚に過ぎず、存在していない、という考えも仏教教派内にはあるのである。しかしナーガールジュナと中観派はそうした考え方は採用しない。ここで言っている「静けさに満ちて」(Tib: zhi-ba) は、「本質としては／実体としては存在しない」の意味に理解される。これについてガーフィールドは、「究極的な観点からするならば事物は、現象的な観点から特徴づけられるような（時間幅を持った）生起と存続と消滅の間断なき流れの中にはないとナーガールジュナは主張している」という言い方もしているが、9 「究極的真理」と「瞬間的存在」という考えには大変微妙な問題が含まれているので注意が必要である。他の部分でも何度か触れたが、「究極」であると言っても、中観派の考え方からするならば、少なくとも議論の上では「絶対の真理」を意味しはしない。現象界においては「絶対」や「本質」は成立しないからである。そうであるならば、いかなるものも本質を持たないということを説明するための概念である、「生じ、存続し、消滅する」という無常の三つの性質についても、それが本質的だとは言えないということでもある。また、無常の三つの性質は、「刹那（瞬間）の存在」に過ぎないと説明されるのであるが、事象が瞬間の連続であるという考えも本当は成立しはしない。瞬間においては生じるための時間幅も存続するための時間幅も消滅するための時間幅も存在しないからである。

以上がこの詩についての中観派の論議だが、静けさに満ちて（寂滅して）いるという言葉は仏教では通常、悟りの世界は論理を超えており、執着に満ちた個々の現象的事象は対象として掴まれることがない、という意味なのであり、「本質という意味では」 essentially という語を「究極の境地では」の意味にとればそのような形而上学的な解釈になるであろう。ナーガールジュナがここまでの展開で、言葉で表せないものを「実体」とか「絶対の真理」のように言葉で表せるとってはならないと言ってきた流れでは、「本質

9. Garfield pp.168-169

という意味では」という限定の言葉として理解するべきであろうが、彼はまた、言葉を越えた世界が存在しないとも言っていないのである。こうした救済論としてのとらえ方は涅槃の章などでより鮮明になってくる。

17. もし生じていない実在 nonarisen entity が
どこかに実在する exists のなら
その実在は生じなければならないだろう
しかしそれがもし存在しない nonexistent なら、何が生じ得るのだろうか

17. 意識

（前述のように、依存的に生じた事物は静けさに満ちていて、実体としては存在していないというのが正しいならば、それでも実体を主張するあなたがたにとっては、生じていない実体というものが存在していることになる。しかし、）「生じていない実体」というものが考えられるだろうか。そんな事物がどこかに存在するというのなら、それが存在となるためには生じなければならないはずである。もしどこにも存在しないなら、生じることができるのはどんなものだろうか。

どんな事物も、生じたから事物なのである。「生じてないもの」は事物ではない。そのようなものを想定する必要はないのである。

18. もしこの生起が
生じているものを引き起こしたならば
その生起によって
まさにその生起も生じるのだろうか

18. 意識

（あなたがたは、何か他の事物ではなくて、依存的生起ということそれ自体が原因となって事物が生じると説明するようだが、依存的に）生じるということが根拠となって、今生じている事物を生じさせたと言うのなら、同じく（依存的に）生じるということが根拠となって、その「（依存的に）生じることそれ自体」をも生じさせるのだろうか。

事物が生じることに原因が必要だと考えた上で、そしてその原因が何か他のこと——原因となるような他の事物——ではなくて「生じることそれ自体」だと言う論者は、「生じることそれ自体」が生じた原因も必要だと考えねばならないはずなので、「それ自身がそれを生み出す」という結論に至るはずだと論じているのである。

19. もしそのもの以外の生起がこの生起を引き起こすなら
無限の後退へと陥ることになるだろう
もし何か生じなかったもの *nonarisen* が生じたというのなら
すべての事物がそのようにして生じ得ることになるだろう

19. 意識

(反対に、) もしある事物が生じることが、その事物やそれが生じること自体以外の、何か他の事物が生じていることを原因として生じるのだと言うならば、無限に続く論理後退に陥ることになるだろう。(その「何か他の事物」は何から生じたのか、と次々と問えるからである。しかしそれがまずいからといって、その事物やそれが生じること自体以外の) 何か他のものではあるが、「生じなかったもの」を原因として、そこから生じると論ずるならば、(それは無から生じるということであるから、無に種類がない以上、) どんな事物も(無という) 同じ原因から生じると説明していることになるだろう。

20. 実在しているもの *an existent* も存在していないもの *a nonexistent* も
生じるということを正しく説明することはできない
「実在しているものも存在していないものもないからである」と
前に述べられた通りである

20. 意識

(永遠に変わらない本質を持つ実体として) 「実在しているもの」も、(それが否定された場合の唯一の存在様態であるまったく) 「存在していないもの」も、事物が生じるということの根拠をうまく説明することはできない。これについては、「実在しているものも存在していないものもないからである」と前に説明した通りである。

最後の行で「前に述べられた」と言っているのは、1章の6. のことである：

実在しているものも、存在していないものも

原因（縁）を充たすことはない

もし事物が存在していないのなら、どうしてそれが原因（縁）を持つことなどできるだろうか

もし事物がすでに実在しているなら、原因（縁）がいまさら何をするというのか

意識：

独立したものとして実在している実体も、その反対にまったく存在していないものも、どちらも原因というものになることはない。まず、もし事物がまったく存在していないのなら、どうしてその存在しないはずの事物が、生じるための原因などというものを持つことができるだろうか。生じる根拠である原因を持つということは、そのものが生じるものであり、存在するものであることになるはずである。また反対に、もし事物がすでに実体として実在してしまっているというのなら、独立して永遠に存在しているそのものに対して、原因がいまさらどう働きかけようがあるだろうか。原因とは存在していなかったものが存在するための働きをするものだからである。実体は最初から存在しているので、原因など要らないはずである。

21. 消滅する事物 ceasing thing の生起という考えは

認められるものではない

しかしそれが消滅しないということも

決して認められるものではない

21. 意識

（そうなると、無常というものを認めるあなたがたは、「本質的に消滅する事物が、そのような本質を持って生じる」のだと言うかもしれない。しかし）消滅する事物が（本質を持って）生じるという考えは矛盾していて認められるものではない。（もしすでに消滅しているという本質なら、消滅した本質を持ったものが生じることはないはずである。）反対に、まだ消滅しておらず、消滅することもない（本質だ）ということも、決して認めら

れるものではない。（消滅しないのならば、「消滅する事物」という表現は最初からおかしいし、無常を認めてないことになる。）

22. 安定状態の 10（住した）存在 static existence が存続するということはない
安定状態にない nonstatic 存在が存続するということもない
安定 stasis は存続しないのである
生じなかった nonarisen どんなものが存続し得るというのか

22. 意識

（「生起」、「存続」、「消滅」の三つの瞬間的なあり方がそれぞれ独立した実体として本質を持って存在しているのだとあなたがたは考えるようだが、）存在している状態で安定している瞬間の事物は、（それが瞬間であるがゆえに、時間的な幅を持って）存続するということはない。かといって、存在状態で安定していない事物が存続するということもあり得ない。安定した存在状態という瞬間的なあり方は持続しないのである。（生じるという事態から切り離されて、つまり）生じなかった安定的な存在状態それ自体が、（独立した本質を持ったものとして）存続するということはありません。

23. 消滅する実在の存続ということは
認められる考えではない
しかし消滅しないということも
どういう意味であれ認められるものではない

10. Tib: gnas-pa. 「生じること」と「消滅すること」の間の、存続している瞬間のことである。存続（持続）状態、存在状態、静止状態、均衡状態、などの訳語で言い換えてもよい。ガーフィールドは英語の翻訳語として、static, stasis, endure/ abide という語を、それぞれ形容詞、名詞、動詞として選択しており、本来は同じ言葉で統一したかったが、英語が持つ独自の語彙の問題からそうできなかったと説明している。

Garfield p.171

23. 意識

消滅するという本質をもった実体的な事物が、（実体であるがゆえに）消滅せずに持続するという考えは矛盾していて認められるものではない。しかし事物が消滅しないということも、どういう意味であれ認められるものではない。（あらゆる事物は無常であり、必ず消滅するのである。）

24. すべての事物の性質が

老化（時間経過） aging と死（消滅） death であるからには
老化（時間経過）と死（消滅）とを除いて
どんな存在が存続するというのだろうか

24. 意識

すべての事物が時を経ていずれ消滅するものであるならば、経時変化と消滅というあり方とまったく関係なく本質的に存在し続ける事物などというものはあり得ないのではないだろうか。存続性という本質（実体）などないのである。

25. 安定性 stasis はそれ自身によって

あるいはそれ以外の安定性によって存続することはできない
生じることが生じること自体から
あるいはそれ以外の生起から生じられないようにである

25. 意識

事物が生じて消滅する間に存続する安定的存続状態というものは、その安定性それ自体の本質を原因として存続することはできないし、またその安定性以外の何らかの安定性によって存続することもできない。これは（前に論じた通り）、生じるということとは何か他のものを原因にして生じるということであって、その生じるということ自体の本質から生じたり、何か他の種類の「生じることの本質」――そんなものがあれば――などに依存して生じたりできないのと同じことである。（安定性、つまり存続ということは、それ自体の本質を持って存在している実体などではあり得ないのである。）

13. の詩で「生じること」について論じたことを、ここで「存続すること」についてもあてはめているのである。安定的存続状態というものは、それ自体の力で安定的に持続しているのではない。安定性についての原因を説明するとなれば、何か他の事象を引き合いに出してこななければならないし、もっと言うならば、「生じること」や「消滅すること」などの概念との位置関係で、相対的に定義できるものだと言えるだろう。

26. すでに消滅したもの what has ceased が消滅することは起こり得ない
まだ消滅していないもの what has not yet ceased が消滅することもない
ましてや消滅するという事 that which is ceasing が消滅することもない
生じていない（不生なる）nonarisen どんなものが消滅できるだろうか

26. 意識

すでに消滅してしまったものがもう一度消滅するという事はないし、まだ消滅しておらず、本質を持って存続しているものが消滅するという事もない。（生じるという事態と関係なく、本質的に存在し続けているような安定的存続それ自体が消滅するという事はあり得ないのである。）ましてや、本質的な消滅という事それ自体が消滅するなどということもあり得ない。生じていないものは消滅しないのである。

ここでは消滅ということ自体が本質を持って存在している実体ではないことが論じられている。これで生起、存続、消滅の三つが、どれも本質的実体としては説明できないことが論じられたのである。

27. 安定しているものの消滅は
認められる考えではない
安定していない何かの消滅も
認められる考えではない

27. 意識

実体として本質的に存続状態にある「安定しているもの」が、実体でありながら消滅するという考えは矛盾している。（実体なら永遠に存在し続けるはずである。逆に、実体と

して存在していないものである、) 安定〔存続〕していない何かも、(実体論者の論理からすれば「まったく存在していないもの」なのであるから、) それが消滅するという事はあり得ない。

28. 安定しているものが
安定していること自体によって消滅することはない
もちろん安定しているものが
安定したものの別の事例によって消滅ということもない

28. 意識

実体として存続状態にあるものが、その実体的存続状態それ自体の力で消滅することはない。もちろん実体として存続しているものが、それとは別の、実体として存続しているものの力で消滅することもあり得ない。(消滅することとは、自ら消滅するか、他のものに消滅させられるかであるが、存続し続ける実体ならばどちらも起こり得ないのである。)

29. どんな実在の生起も
認められる考えではないのなら
どんな実在の消滅も
認められる考えではない

29. 意識

実体はいかなるものも、存在していない状態から存在状態へと生じるということはない。また、どんな実体も、存在状態から存在していない状態へと消滅することはない。(実体については生起や消滅という経時変化は認められないのである。)

30. 実在している事物にとって
消滅ということはありません。
実在でありながら非存在であるような
一つの事物などということはありません。

30. 意識

本質的に実在しているような実体的事物が消滅するということはない。（もしそれが起こり得るといふのなら、一つの実体の実在していながら、なおかつ非存在であると言っていることになる。）一つの事物が実体であり、かつ、まったく存在しないものであるなどということとはあり得ない。

31. さらに、非存在にあつては
消滅ということは考えられない
ちょうど二度目の打ち首などというものが
行えないように

31. 意識

また、（実体の否定形は「まったく存在しないもの」であるが、）まったく存在していない「非存在」が消滅するという考えもおかしい。初めから消滅状態にある存在していないものが、もう一度消滅するなどということは、打ち首になって死んだ者が、もう一度打ち首で死ぬと言うようなものである。

32. 消滅はそれ自身によって消滅することはない
もちろんそれ以外のものによって消滅することもない
ちょうど生じることがそれ自身から
もしくは他のものから生じることができないように

32. 意識

実体として本質的に存在している「消滅」が、それ自身の消滅という力によって消滅するなどということとはあり得ない。もちろん実体的消滅それ自身以外の、何か他のものの力で消滅させられるということもあり得ない。（これは前にも述べた通り、）実体的に生じることがそれ自身から生じたり、何か他のものから生じたりできないことと同じである。

13. の詩で「生じること」について論じられたことを根拠にして 25. で「安定」について述べられた論法が、ここでも「消滅」について繰り返されている。

33. 生じ、消滅し、そして存続することが確認されないので
部分と原因で構築された事物 compounded thing (有為) は存在しない
もしすべての構築された事物が確認されないなら
非構築的なもの uncompounded (無為) などがどうして確認されるだろうか

33. 意識

生じ、存続し、消滅するということがどれも (本質／実体としては) 主張できないものならば、部分と原因によって構築された普通の現象的事物もすべて (実体としては) 存在しないことになる。もしそのようにすべての構築された事物が (実体として) 確認できないもの――空――であるならば、部分と原因によって現象として構築されたものではないような非構築的なもの (、つまり本質的実体) などどうして主張できるだろうか。

34. 夢のように、幻影のように
ガンダルヴァ Gandharvas 11 の都市のように
生じることと存続すること
そして消滅とが説明されたのである

34. 意識

夢や蜃気楼やガンダルヴァの空中楼閣のように、生じること、存続、そして消滅とが、以上をもって説明されたのである。

ここで夢のようだと言われているのは、因果的なものの三様態である生起、存続、消滅が、「本質を持った実体としては」夢のようだということである。現象的な事物が夢だとか存在しないものだとか言っているのではない。普通の感覚ではそのものの本質を持っているように見えてしまうのだが、その見え方が夢のようなのである。現実には夢であり、その裏には本質的存在があるのだと考えると逆の解釈になってしまう。また、夢も現実も位相の違いに過ぎないという見方は説得力があるが、ここではそういう意味でもない。

11. インド神話に登場する空中に住む精霊。有翼で上半身が人間の男、下半身は鳥の姿。飛天。仏教に取り入れられて八部衆となった。漢訳は「乾闥婆 (けんだつば)」。